

第二章

郡山商業学校時代



四年生頃までは詩作に打ち込む青白い秀才と受け止められていたが、最上級の五年生になり級長に推されるとともに応援団長も兼務することとなった。この頃から、覇気と指導力に満ちた青年へと変貌していった。

当時、歴史が浅い郡商には応援歌が少なかったため、他校との応援合戦の際に劣勢であったことから、同級の塩谷祐介や五十嵐大祐とともに剣道部応援歌を作った。その後さらに歌詞に推敲を重ねて、「郡商健児の歌」として全校の応援歌へと高まって行った。

一方で、在校中から岡登志夫（丘灯至夫）が主宰する「蠟人形」郡山支部の同人となり詩作を始めた。この時期はまだ入選作はなく、詩作の活動は主として郡商の校友会詩を中心としていた。

昭和九年実父が銚子郵便局長として栄転したことで、郡商二年の時に銚子を訪問することになった。「銚子の印象」はそのときの感想を綴ったものである。たまたま、実母の実家は銚子の網元であったことから、海や漁船の印象が詳しく語られている。



学芸会で「西安事件」を演題に蒋介石役を演ずる—左端が太田博



新装なった校舎を背景として五百淵で—右から2人目が太田博1人置いて五十嵐大祐

汽 車

一年
太田
博

「がたん。」 僕は立って居たから覺悟しては居たが、
思はず體がぐらついた。

今、日和田驛に着いた處だった。

四邊は畑や田でその中に、

ぽつんと驛があるので餘り貧弱だと思った。

汽車はもう發車して畠の中を走ってゐた。

青い麥畑を走り、田の上を飛ぶやうに、

レールをすべつてゐる。

左手の窓から眼を外景に投げると、

麥畑と思はれる彼方に雪がとけてしまったのか、

白い姿を消した奥羽の連山が巨體をうねらせて、

前方の森へ龍頭を没してゐる。

森林を横ぎり、川を越えて本宮指して一直線に汽車は走つてゐる。

(昭和一〇年二月二五日發行)

銚子の印象

二年 太田 博

一、大漁踊

もう、すっかり銚子の町も、闇につままれてしまひました。夕飯をすました兄と私は、二人で観音様の大漁踊を見に行きました。

外へ出ると、流石にうすら寒さを感じました。もう秋が近くなったのかと思ひました。道端のこぼろぎが鳴き止みました。

ふと立ち止って町を望みますと、墨繪のやうな町の屋根々々がずっと濱まで大波のやうに續いてゐました。幾十となくともった灯が、赤く光つてゐるのは観音様の邊りでせう。そしてその灯の明りで、渚の白い波の背が見えるやうな氣が致しました。ちっと立ってゐ

ると、ざぶくいふ波の音も聞えるやうにも思ひました。やがて明るい町角へ來ました。

観音様の境内に入ると、野趣に充ちた太鼓や笛の音がゆるやかなリズムをくりかへして流れて來るのでした。避暑客慰安の踊りなので、澤山人が出ました。何か大聲で客を呼んでゐる香具師、大佛の前で怪辯を振ふ易者發音の變な支那人の藥賣り、それから織るやうな雑踏を泳ぎ出ると稍高い櫓から八方に張られた提灯の光が晝のやうに輝いて、觀衆の顔を赤く照してゐました。

櫓の上では數人の男達が太鼓を叩いたり、笛を吹いたりしてゐましたし、鉢巻をした若い男たちや姉さん被りの女達が、櫓の上の囃につれて踊りました。

渚に躍る水泡のやうににぎやかな囃子は、野趣に満ちたりズムを奏で漁場町の空を魅了して流れました。だんく人が集つて來ました。観音様の欄干は人一杯になつて終ひました。私達は雑踏を避けて境内を出たのでした。

二、夕

御前鬼越に海を見ると渚に白く波がもり揚って青い海が光ってゐました。

水平線の空を見つめてゐると、西の茜雲に反映して一筆うすく桃色をはいたやうでした。

そしてそれが夏を象徴する滴るやうな御前鬼山の緑と色に重り合ふ町並とに調和して何とも言ひよふのないうい美しさを表してゐました。

その海から吹いて来る潮干い風は暮色迫る町々を脉膊つて、もう小高い馬場臺へ流れて来るのでした。

丁度そんな時には、なまあたゝかい膨みのある海、桃と藍で織りなした海を絶えず微動してゐる海、直感し、強く鮮やかな印象を植えつけたのでした。

そして海といふ巨人の胸の鼓動を感じの強い少年の胸に傳へて呉れるのもそんな時でした。

三、夜の川口へ

やがて明るい町並を過ぎて、急に漁家の陰の多い景色の中を私達の自動車疾走して行く。黒い漁家の間からちらり／＼と時々燈臺の光が粉々に散れて輝い

てゐるのが見えるのも美しい。乗ってゐる人は私達を除いては、皆土地の人達なので、夜だし、車の揺れも強かつたのでうす暗い電燈に顔を見合はせてゐるばかりだった。

暫くすると車の揺れも穩かになつて、すう／＼と停車すると、もう此處が川口であつた。私達はそこで降りると、目前に千人塚があつた。小山のやうな塚に墓標のやうな澤山の棒が幽霊のやうにしょんぼり立ってゐた。

「此處が千人塚だよ、海で遭難した人々が澤山眠つてゐる」兄がわざと聲色を使った。私達はかへつて物凄く戦慄が背を這い上るやうな氣持と、海から吹いて来る風が其の人々の溜息のやうな氣持とが、私の心をおの／＼かせた。私達はそこを去つて濱へ下る。ドブ／＼とザ／＼と打つて来る波もしきりに哀哭の情を訴へて、波の穂の彼方に黄金に散る燈臺の灯も何か空虚な物があるやうに感じられた。

夜の川口の景色はこんな凄味を帯びてゐるのだ。

四、漁船

今日は兄と二人で又漁船を見に行く。

馬場臺を降りて行くと、何となく港町らしい氣分が溢れてゐる。貝殻を澤山瓦のやうに屋根に積み重ねられ、ペン／＼草が生へてゐる。庭に蛤の砂利が敷かれてあるといふやうな、兩側の家は殊に私のやうな山家育ちで海を忘れたやうな者にとつては嬉しい印象を植えつける。

段々と濱近くなると貝がらで道が續いてゐる。鯉魚節を作つてゐる小屋や、いわしをひろげた筵や、棒材に澤山の網を干した廣場を通り抜けると、高い磯の香が鼻をついてくるのを覺える。と、大きな漁船が陸へ上げられて綺麗に並んでゐる姿が目に入つて來る。これを引き上げるのに七日もかゝるそうだ。船と船との間から海が青く微笑してゐる。

やがて兄は新川の家の船を見付けた。舳の方のスクリューの上に、下駄をぬいて、やっとよち登る。船に上ると強い夏の日光に焼けてゐる甲板が暑くてたまらない。下駄を又はいてガツタラ／＼甲板に行く。

「おぢさん、博が來ましたよ」兄が大聲で叫ぶと舳の方の船腹で何か仕事をしてゐた五十位の人——何となく人の好いニコ／＼顔で甲板へ上つて來た。

「オー博さんか、大きくなつたね、もう中學何年だい」「いやまだ商業二年ですよ、でももう直に僕位に大きくなるでせう。」兄が代つて言つて呉れた。僕はピヨコンと御辭儀をすると、舷へ腰を下して目を遠く海の彼方へ投げながら、色々な話をした。

此の八月は漁船は出漁出來なくて、澤山の船は濱一杯に引き上げられて、船の破損した所を修繕したり、化粧したりするのださうだ。

濱の子供達が海で泳いでゐる。僕は船を降りて波打ち際を歩いて行つた。ざぶ／＼と打寄せる波は足を洗ひ、砂をさらつて行く。其時、ぢわ／＼と足の下の砂が崩れてくすぐつたのも、濱でなくてはわからぬ面白さだ。私は二つ三つ綺麗な貝を拾つて焼けた砂地を歩いては波に入りして船へもどつた。

それから僕は暑い日光を避けて、船腹に寄りかゝつて美しい一直線の水平線からうねり／＼來て、やが

て白くもり上る波の背が見えるやうになると、直ぐ泡となつて引き、又もり返して来る大自然の寵兒の群を見つめてゐた。

日光の強さはかへつて、ぼんやりしてしまつたやうな對岸の波崎の砂濱がづうつと、突き出して利根川の河口を狭めてゐる。

白い雲

青い空に

青い海

それに漁船――

出漁期だったらなあ――と幾度も思った。

おぢさんに海の話をお別れしたのは晝も大分廻つた頃だつた。

【注・銚子は実の父母と兄弟の住まう街であり、

また、母の実家である網元があり、里帰りを兼ねての訪問であつた。】



銚子の実家で、左から実母てう、
弟克、博、姉綾、兄正

福島県郡山商業学校校友会会報第九号（昭和十年五月）

よしきり

三年 太田 博

よしきり よしきり

よしきり 啼けば

何時か 母様思ひ出す

遠いあのやまかは越えて

みそら輝く 星の下

よしきり よしきり

よしきり 啼けば

何處か 母様居るやうな

遠いみそらのはてのはて

明の小ほしの 落ちるやま

よしきり よしきり

よしきり 啼けば

戀し母様 呼ぶやうな

遠いあなたの 白い海

渡ってお出でと 一つ星

森の椿

空は晴れたり
雲は棚引けり
緑は光れり
椿の森 古びし社
余ら 森巖の氣
吸ひつ 登りつ

休みて見ん

甲ひとり云へり

赤き 熱情こころの

咲ける森に

今

立てり 椿の岡
わがふるさと
わがふるさと
遠くかすめり

乙ひとり 語る

彼が 思ひ出

椿

重げに碎け散りて

不如歸のさびし聲の

山の氣に

融けるのみ

さゝやかなの宴うたげ 終りぬ

さらば

椿の森よ

赤き情熱こころの咲ける森よ

焚火

運動會の跡

新聞紙、紙片、俵が集められて

ひょうくんと小さな火の手

生徒達は煙を避けて

焚火の周りを圍む

年一度

小さな胸を躍らす

歡樂が

焰となつて空に消えて行く

あゝ

夕焼雲のやうに怪しい血響を想はせる

火の子らよ

眞黒になった薔が
焔の蔭に崩れ落ちて
少年は顔を反らす
火の子らよ
何故 そう
絡りつつ
舞ひつつ 溜息のやうに
わななくのか

流 譜

朝靄濡れし 舳に倚り
月冷むれ面 望むれば
消えつ結びつ 流れゆく
川のうたかた 吾に似て
甘き花片 散り添ふも
浮世の果敢なき 夢なれや

桃咲岸邊 もやひつゝ
ゆはたと敷きし 花びらの
淀につなぐ 苦のふね
枝もたわゝの ひと枝を
手折りてかざす おぼしまに
強く生きよと 香るなり

讚美歌

朽つべき財寶追ひ求めつ
空しき榮得てほこりつ
何時とは罪の暗きやみぢ
さまよひたるは何の故ぞ

奇すしき愛の御手に引かれ
憂ひの谷間のぼりゆきて
安き牧場にいこふ幸は
主にありていくよろこびなり

功なくして美とせらるる
愛の十字架は誰が爲ぞや
あゝ此の罪に汚れし身に
救ひの光り與へられぬ

主よ御意の十字架をもて
わが進むべき道を示し
平和の聖國來らすまで
よろこびをもて負はせ給へ

死の刺何處恥は何處

劔の

イエスの聖名を冠として

地の極までも行かせたまへ

極光の國も椰子の里も

神のさかえを讃めたゝへよ

聲の限りに真心もて

神の榮えを讃めたゝえよ

郡商健児の歌

作詞 塩谷祐介・太田 博

作曲 五十嵐 大祐（節をつけ応援歌となる）

（「國の護り」の節で唄ふ）

朔風斜めに吹き荒れて

安積野寂と聲なきに

下弦の月に嘯ぶくは

五百陵の益荒男ぞ

夏は常磐の松を食み

冬は千古の雪を噛み

魂も身も鍛へしは

五百陵の益荒男ぞ

嗚呼蓋世の勇を練り

天地の靈氣身に享けて

正邪を別つ鉾取るは

五百陵の益荒男ぞ

孤劍一閃引き抜きて
星影刃に映ずれば
はや玲瓏の月落ちて
黎明のそら白み來ぬ

大地に嚴と立ちし者
莞爾と笑むやその胸に
灼熱の火魂は昇り來て
永久の勝利を約すなり

【注・当初剣道部応援歌として同級の塩谷祐介が作詞したが、
後に各節の最後の小節を「ああ郡商の健男児」とし、
さらに太田が五節目を作詞して、全校応援歌「郡商
健児の歌」として改編された】

歡送歌

作詞 太田 博
作曲 不 明

星より星へ晝きたる
象形文字を判ずれば
今日の勝利を黙示して
輝く丘や五百陵

万象隴の朝まだき
大鵬虚空に羽ばたけば
群星潰ついでえて燦爛さんらんの
日輪行手を導きぬ

【注・郡商応援歌として歌われた】

